



博物館の裏側を知る

昨年(2022)の4月、私は博物館へ異動してきました。私が最後に博物館へ訪れたのは、おそらく小学生くらいの時だったかと思います。もう10年以上前になるでしょうか。「エントランスにマンモスの骨格標本があったな」くらいの記憶しかありませんでした。

数年ぶりの博物館はとても新鮮で、勉強も兼ねて仕事の合間に展示室を何度も見て回りました。釧路の文化や歴史にきちんと触れたのは大人になってからではこれが初めてかもしれません。特に印象的だったのは「霧笛」です。これは視界が悪い霧の中を安全に航海するために音を鳴らすものです。調べ

てみると、2007年頃から全国的に廃止の方向となり、釧路の霧笛も廃止になっていたようです。かなりの存在感があり、近くで見ると迫力満点でした。どうしてこれが印象的だったのかというと、少し話がそれますが、私が高校生だった頃、部活動で作成していた部誌の名前が『霧笛』だったからです。展示を見てふと思い出しました。名付け親は先輩で、由来はまた少し違った気がするのですが……もしかしたらこの「霧笛」とかけていたのかもしれない。

博物館で仕事をするということ、これを他の人に話すと、「楽しそうだね」とか「ゆったりのんびりしてそうだね」とかいろいろな印象を持たれます。私自身も同じようなイメージを持っていましたが、「ゆったりのんびり」については実際に周りを見てみるとそうでもないように思えます。私は事務職員なので学芸分野に関する業務はほとん

どないのですが、学芸員の皆さんは観察会やイベント、企画展の準備などがあり、その合間に原稿の執筆をしたり調査のため外に出たりと毎日大忙しです。特に企画展は、内容だけでなく展示のレイアウトやポスターなど、さまざまなところに来館者を惹きつけるような工夫がなされていて、熱意がひしひしと感じられます。遅くまで作業をしている方もいて、「ゆったりのんびり」とは程遠いです。実際に博物館の裏側に立って見てみないと分からないこと、気づけないことがたくさんあり、今とても貴重な経験をさせていただいているのだと感じています。

長くなりましたが、皆さんが大切にしている博物館を支えられるよう、私も微力ながら頑張っていきたいと思えます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

(伊藤 友香)

暮らしの痕跡を集める

以前にも報告させていただきましたが、ここ数年ほど神社を中心とした釧路の信仰に関わることを調べています。この1年ほどの間に、ある神社と寺院がそのお役目を終えました。

1つは新潟県出身の漁業者が中心となって、昭和の初めに故郷の神社から勧請して建立されたまちなかの神社。かつては夏に盆踊りも行われていたようで、地域の人々が集う場所でありました。

神社の周辺にはかつて同県出身者が大勢お住まいだったそうですが、まちの郊外に移転するなどして今はほとんどいないというお話でした。神社と

は関わりのない方が増えて、ここを支えられる方も地域にはいない。そこでこの判断とお聞きしました。神社の記憶を伝えるものとして、建物の入り口に掲げられていた扁額や幟などを収集させていただきました。

もう一つ、まちなみ発祥の地とも言える地域にある寺院が後継者不在という理由で役目を終えました。秋のお祭り(昨年9月)が最後と伺い、記録も兼ねておじゃましました。ご本尊は金毘羅権現。

室内には漁業者が奉納されたお札や漁獲された魚を運ぶために使われたもっこ、そしてまき網らしき漁法を使っている漁が描かれた絵馬などがあり、漁業者から信仰を集めていたことがわかります。

釧路はかつて漁獲高日本一を連続13年、また100万トンを超える年もありました。釧路にとって漁業はまちの発展に大きく寄与してきました。

「板子一枚下は地獄」。漁業者は常に危険と隣り合わせであることを教えてくれることわざです。神社にしろ、寺院にしろ、大漁祈願や自身の命の安全を祈る気持ちを託す。奉納された品々からは、人々にとって今よりも信仰が身近だったように感じられます。

漁業に限らず、さまざまな人々の暮らしの痕跡を見つけ出しては集めていく。地道ではありますが、このような活動を続けることでまちの歩みを明らかにしていくことができると思っています。

(戸田 恭司)